

アーチルニュース ちえなっぷ

発行元：仙台市発達相談支援センター 〒981-3133 住所：仙台市泉区泉中央2丁目24-1
TEL：022-375-0110 FAX：022-375-0142 e-mail：archl@luck.ocn.ne.jp

<http://www.city.sendai.jp/kenkou/hattatsu/gaiyou/>

ひらき・かたい・つながり & CHIN UP!

今回のちえなっぷは、アーチルにお母さんの部屋「まるん」が開設されたことをお伝えいたします。あの時、子どもの抱えた現実に直面し「どうしようと思ひ悩み無力な状態に置かれた」お母さんたちが、自分を「語り」、「つながり」、「できることから始めたい」と「まるん」を開設しました。

「まるん」は、自分自身で「いが」をひらき・つながる空間という意味とのことです。わが子の存在がゆえに、アーチルスタッフとの出会いがあり、お母さんたち同士のつながりができていきました。この活動をうかがいまして、「人間の出発点は、無力であるがゆえに他者に開かれた共同性にある」というワロンのことばが思い浮びました。

ワロンとの出会いと考え方をご紹介します。ワロン(1879-1962)との出会いは、心身障害者相談センターにおりましたときに、宮城教育大学の(故)久保田正人先生の講義をうかがったときですので20数年前になります。久保田先生は、ワロンの発達理論を基に、「生まれたばかりの子どもが人を求める力を持っており、人との相互作用の中で人間として発達していく」ということを話されたのです。ワロンは、「子どもは、他者に開かれた系として出発し、無力であるがゆえに周囲の人とともにある関係の中で発達成長していく」と説き、「緊密な共同性の中で生理的生を維持し、姿勢や表現を介して他者を動かし他者と関わる情緒的共生を経て、新たな自我を確立していく」というのです。すなわち、生きる主体である人が、自分の中に、自我と、その不可欠な補完者である他者との区別を打ち立て、この自我と、他者は、互いに対立的ではあるが一方なしには他方も存在しないというのです。

このようなワロンの人間理解に従えば、人は対立し批判し合うことはあっても、他者なしには存在しえず、この自我こそが他者の中で自己実現の主体となり、他者のためにも生きることができる社会的存在としての基盤となり、一歩踏み出す勇気を持たせてくれるものともなるといえるのではないかと思います。

アーチルにおいても、困難な課題や状況に直面したときこそ、閉じてしまうのではなく、アーチルを利用して下さる皆様に、できることだけでなくできないことも伝え、どうしたらよいか一緒に考えていただくということを、これまで大切な銘としてまいりました。困難な状況に直面しますと閉じてしまいがちですが、互いに期待し、支えあい、批判しあうつながりの中でこそ開いていく勇気を得ることができると実感しております。

新たなつながり「まるん」の誕生は、アーチルのスタッフにとっても大きなはげみとなっています。お母さんたちにとっても、新たな出会いの中で互いに自分たちの力を引き出し合い、つながりの中でさらに新たな自分を発見し Chin up! していく場となっていくことを期待したいと思います。

所長 末永 カツ子

互いに支え合う
地域への第一歩

保護者による新たなつながり～「まろん」がスタート～

仲間として支えたい

あの時、私達は・・・

▼宝順子さん（ウエスト症候群 14 歳男児の母）
どうして私の所なの？何か悪いことしたの？と不安でいっぱいでした。

▼鈴木なおみさん（結節性硬化症 15 歳女児の母）
止まらない子どもの背中を追いかけ、毎日かむしゃらに走っていた。自分の子の成長のように一緒に喜んでくれる仲間がどれだけ私の人生の支えになったことだろう。

▼田中由香さん（自閉症 4 歳男児の母）
息子は 2 歳を迎えても、なかなか「ママ」と言ってくれませんでした。「自閉症って何？」って言うくらい何も分からず、暗闇を歩くような、怖さと不安と悲しさをしばらく抱えていた。

▼内山春美さん（自閉症 4 歳男児の母）
我が子に障害があると宣告され、不安で一杯になった時、たくさんのお悩みを抱え、自分ひとりでは同じ考えを繰り返すばかりで答えを見つけられなかった。

▼内山慶子さん（自閉症 3 歳男児の母）
「これから先どうなるのだろう？」「私にこの子を育てられるのだろうか・・・」取りとめのない不安が次々に押し寄せてきた。

出会いの場を支えたい

グループのスタッフとして保護者から「どうして私だけが・・・」「これからどうしていけばいいの？」といった辛さや不安を受けとめたときに、自分達に何かできないものかと一生懸命、知恵を振り絞って考えるが、そのたびに無力さを感じずにはいられない自分がある。しかし多くの保護者と出会い、一般論ではないその人の生き様と触れ合い「このときのお母さん達の気持ちを救えるのはお母さん同士なのだ」と気づく。療育の場で折にふれ出会った先輩お母さん達の存在は「アーチルの宝物」だと実感！私達にできるのは「同じ思いを分かち合える人」との出会いを作ることだと！！
(アーチルスタッフ 渡部愛・本田志津子)

アーチルの初期療育グループでは、先輩お母さんとの出会いの場を作り、同じ悩みを持つ母親と職員が力を合わせて、自分の力で一歩前へ踏み出すきっかけづくりをしてきました。この 3 年間初期療育グループ参加者は 779 名で、講師をつとめて下さる等、先輩お母さんとして活動してきた方は 50 名になります。互いにサポートし合う中で「自分も役に立ちたい」「できることをしたい」という意志を確認し合えるようになりました。この力をつなぐために 5 月にネットワーク会議を開催したところ 14 名のお母さん達が中心となり話し合いを重ねた結果、保護者同士でお母さんの部屋「まろん」を誕生させました。この活動を紹介しながら「障害を持つ児の保護者への支援」「地域で自分らしく生活するためのネットワーク」について考えてみたいと思います。

アーチルの宝物 ～「まろん」お母さんの部屋～

聴くことで

あまり身構えずに子育てしてみようかなと思えるようになった。真っ暗なトンネルの中を歩いているようだったけど、少し先が見えてきたような気がする。

お互いの
気付き

話すことで

ここまで我が子を育ててきた自分を誇りに思う。認められている実感が自分自身への自信をつかむ。我が子の人生を考えるきっかけを得て自信がつく。

～できることから始めたい～

私達は
気軽に、安心して、集える空間を作りたいと思います。
自然体で話のできる空間を作りたいと思います。
支援する側も元気になれる機会を作りたいと思います。
これらを「まろん（ママ達の集える場の愛称）」でできればと考えています。

この指と～まれ！方式で集った仲間達。最初は何ができるのか不安で、個人情報勉強などと堅いことから始まり、まるで栗のイガイガに恐る恐る触れているようだったけど、ふと時間があれば一人のお悩みなどで話しこみ「あ～でもない、こ～でもない」ではなく、「こうなんじゃないの」先輩ママ。「その一言を聞いたかった」と表情がキラリと輝く後輩ママ達。その光景にこんな部屋が欲しかったのだと実感！もしかしら仙台市に 1 つではなく、区ごと、いや地域ごとにあったらいいのかもしれないと夢は広がるのです。

荒ひろみさん（硬膜下血腫 16 歳女児の母）

第 1・3 火曜日、第 2・4 木曜日 10:30～12:30
アーチル 2 階で待っています。

つながりからの芽生え

私達ができることって・・・

▼三浦久美子さん（自閉症 16 歳女児の母）

どうぞ「まろん」に立ち寄ってみて下さい。「まろん」のティータイムは不思議な効力があるはず。普通のお母さんなのだけど、実は段々ただものではないお母さんになっていくらしい。

▼柴田和子さん（自閉症 13 歳男児の母）

落ち込みから這い上がるのは、それぞれがやるしかないけど、一緒に聴いてあげることにはできるんじゃないかな？子どもが小さい時は先が見えず、とても不安ですよ。

▼佐藤由美子さん（自閉症 13 歳男児の母）

母同士の横のつながりがとてもありがたかったし、大きいと思う。そんな昔を思い出しつつ同じように不安や悩みを持つ母達の話に耳を傾け、応援したいと思っています。

▼永澤直子さん（福山型ジストロフィー 13 歳女児の母）

突然話した娘の言葉を一緒に喜んでくれた先輩お母さんの存在。喜びや悲しみも共有してお互いの支えあう出会いを楽しみにしています。

▼目黒久美子さん（自閉症 22 歳女性の母）

“私” とりあえず「まろん」において！“私” は“あなた” だもの。何でも聞いてあげるからね。正直、障害児育てるのって大変だよ。だからね、育てている私達って超偉いよ。一緒に歩いていこう“私”，何でも教えてあげるからね。と「まろん」母ズは健気にも考えています。

地域に広げたい

今年の新緑の頃から、ネットワーク会議担当者としてお母さん達と出会い、半年が経過した。パワフルで明るいお母さん達は、時には圧倒されるほどで、「私も頑張ろう」と前向きな気持ちにさせてくれた。一人一人の個性溢れるヒラメキ、会を重ねるごとに新たな発見があり、新たな出会いがある。「やりたいたからやる」それから何かを生み出していくのだと知る！このつながりを地域に広げていきたい。そのための、良い出逢いを私も支える役割を担いたい！！
(アーチルスタッフ 木村映理子・内藤寿子)

かけはし

「アーチル」とは「アーチ (arch : 橋)」と「パル (pal : 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思ひます。



第2回療育セミナーを終えて

「わかって！ 私たちのことを～高機能自閉症の青年からのメッセージ～」をテーマとして、今年度2回目の療育セミナーを11月20日に開催しました。今回は、アーチルの取り組みを報告した後、当事者であるAさんとBさんからメッセージがありました。次に、子どもの生活研究所・柏木理江さんから「本人の状況に合った活動ができる場が必要！」、横浜やまびこの里・中山清司さんから「自閉症の文化を認め理解し、居場所や仲間作り、就労支援や生活支援が必要！」という講演がありました。

障害を伝えられた時はショックでしたが、ほっとした面もあります。周囲の人には温かく見守って欲しいし、自分たちのことを分かって欲しい。(Aさん)

ビデオでメッセージしたBさんは、「静かに生きていきたい。自分の世界を大事にして、自分のペースを守って生きていきたい。」と話していました。



終えてからAさんは、「みんなの前で話せたことが自信になった」と話していました。228名の参加者からも、「本人が一番苦しいことが分かった」「自分の価値観の押しつけに気づいた」「息子の10年後、20年後の未来からのメッセージでもあるような気がした」などの言葉がアンケートに寄せられました。

セミナーとフォーラムを開催します！

第3回療育セミナー「自閉症児の学齢期における発達支援を考える」

日時：平成18年1月22日(日)13時～17時

場所：仙台市役所8階ホール

講師：鈴木和憲氏(保護者)

大屋 滋氏(日本自閉症協会千葉県支部長)

東條 恵氏(新潟県はまぐみ小児療育センター)

内容：学齢期の自閉症児が地域の中で自立した生活を送るためにはどんな支援が必要かを考えます。

発達支援フォーラム「アーチルと学校との支援ネットワークづくり～特別支援教育との連携・協働に向けて～」

日時：平成18年2月18日(土)12時30分～17時

場所：楽楽楽ホール(太白区文化センター)

講師：柘植雅義氏(文部科学省特別支援教育調査官)

大塚 晃氏(厚生労働省障害福祉専門官)

内容：アーチルでは、市立小中学校4校と共に、本人・保護者の立場から「個別の支援計画」の作成や事例検討会等を行っています。当日は、この取り組みを報告しながら、厚生労働省、文部科学省の担当官から講演いただき、特別支援教育との連携・協働のあり方について考えます。

余暇について考えてみませんか？

知的障害者の余暇活動を支援するネットワーク「ゆらねっと」が誕生しました。6月から、本人、保護者、支援者が協力し、余暇の場を創出しようと話し合いを進めています。

「友達が欲しい」「仕事の悩みを語り合いたい」「仕事帰りに何かしたい」「休日が暇だ」という本人の話を出発点として、やりたいことを実現していくためにはどうしたらよいかを、「本人」「支援者」という枠にとらわれず共に考えています。「話し合ってるだけじゃダメ！動きながら考えよう！」「来年2月に交流イベントをしてサークルを作ろう！」という意見も出て、盛り上がっています。

宮城NPOプラザ「レストランぴあ」で活動中です。

お問合せは成人支援係・後藤(375-0176)まで

編集後記

「まるん」の話し合いに参加しました。みなさん自ら意見を出し、さらによいものにしていくとする雰囲気が満ちあふれていました。それは、「まるんで、不安を抱える保護者とつながりたい」という思いを一人一人がもっているからだと感じました。

このような活動を地域に広げていくために、地域の方や地域の資源とつながる役割を担っていききたいと思います。(首藤)